

『翔ぶが如く』と南洲墓地

商経学科 教授 岩上 敏秀
(令和3年4月 着任)



明治維新の頃の歴史が好きです。維新から西南戦争までを描いた『翔ぶが如く』は、司馬遼太郎の中でも好きな作品。政府に反発し鹿児島に戻り、神輿にかつがれるようにして西南戦争に向かった西郷隆盛。40歳そこそこで政府の実権を握り、国家統治体制の青写真を描き、実現させた大久保利通。県内では西郷さん的人气が別格ですが、一人で近代国家の礎をつくった大久保さんの凄さにも圧倒されます。

市内の維新にまつわる記念碑を週末に訪ねています。中でも、西南戦争で散った薩摩兵士を祀った上竜尾町の南洲墓地。村田新八ら側近が西郷さんの墓を囲みますが、目を引くのが桐野利秋。別名“人斬り半次郎”として幕末の京都で恐れられていた人物（諸説あり。「人を斬ったことはない」説も）。男前で洒落者だったといわれ、墓碑銘を見ると利秋の「秋」のヘンとツクリが逆。桐野を偲び、洒落っ気を出して刻んだためとのこと。思わずニヤっとしてしまい、暗いイメージの“人斬り半次郎”の別の顔を感じたひと時でした。

記念碑を訪ねては、当時の歴史や小説上の人物に思いを馳せるのが週末のひそかな楽しみとなっています。鹿児島ならではの小説の楽しみ方かもしれません。